本州大学紀要第２号（昭和48年３月）

ことば雑考〔Ⅰ〕

Some Considerations on Some Japanese Classical Words

長谷川　鑛平
Kohei Hasegawa

哲学の歴史を試行錯誤のディアレクティークだといった人がある。そして試行錯誤の堂堂巡りの末，昨今では分析哲学――哲学用語の分析に行き着いた。行き着いたというより，落ち込んだといった方がよいかも知れない。若き日の気まぐれも手伝って，哲学科を出てから40年，私は自らを哲学者と呼んだことはない。てれくさいからである。その私が，読書生活の過程で，ふと，自分の使っている用語のあいまいなのに気づいた。分析哲学のしかみにならったわけではないが，ふと不審の浮かんだとき，私は座右にある若干の字書などを調べて，自分の理解を確かめながら，多少の整理をこころみてみた。そして若干，納得のいったものもあったが，また気づいたことは，それがいずれもいかにも好事家的で，とても紀要に投稿できるようなものではないことである。江戸末期の文人ではないが，私もそんな悪趣味にうつつを抜かす年齢になっているのであろうか。ともあれ近ごろ詮索したもののうちから二，三，下に摘記することにする。

一往（いちおう）

私がもっぱら「一往」と書くことにしたのは，いつ頃からであろうか。最近拙著『校正の美学』の一読者から，葉書をもらった。若干の私の用字用語を取り上げて，異論を唱え，間違いであると言い切ってはなかったが，よりベターには，普通の人の書くようになさったがよかろうと，親切なご教示であった。「よりベター」とはいささか重語の嫌いがあるが，その人の用語なのである。その槍玉にあがった第一がこの「一往」であった。「一般には一応と書きますし，常用国語表記辞典類にも一応を基準としてありますので，一応がベターと存じます」。またベターである。

ところで「いちおう」という日本語は私も常用していることだし，日常用語として定着していることはまず間違いないであろうが，これをどうして「一応」と書き表わさなければならないか，それが私にはわからないのである。もっとも漢字表記は，伝統的にそうなっており，一般に疑問をさしはさまれないならば，それで「いちおう」結構なはずである。私も一応と書くか，多少気がすすまないならば，かなで「いちおう」と書けば，それで事済みとなるのであるが，それが私としてはどうも簡単には従いきれない。そこでとりあえず『角川漢和中辞典』の応【應】のところを引いてみた。字義としては「こたえる，むくいる，動に対して即刻折り返して反応する，相手次第の反応のしかたをする（順応・適応）」というのが「応」の本来であるらしく，そこで「とりあえず」という意味も出てくるのかも知れない。そうとあれば「一応」も肯定できないわけではない。しかし，私には一応はいちおうの音通からの宛て字のように思えてしようがないのである。はたして宛て字ならば強いてそう書く必要はないし，かなで「いちおう」と書けば，無難でもあり，結構なはずである。

今は忘れてしまったが，私が「一往」と書くよ

うになったのは偶然ではなく，たれか，森鷗外か小宮豊隆か，あるいは幸田露伴か，たれか権威ある人の文章を見て感ずるところ，共鳴するところがあって，あえて時流を拒否して，一往と書くようとなったはずである。しかし，今は何も記憶がない。

そこで，もう一度座右の字引にあたってみた。『角川漢和中辞典』では，当該文字，その場合応が二字目に来て，したがって応の熟語としては列挙されない熟語は，その項末に▽を付して列記してある。しかし，応のところには▽内応・反応・呼応・感応・順応・適応と出ているが「一応」は見あたらない。

そこで同じ辞典で「一」の部を見ると，

一応【應】すべて。いっさい。〈国〉ひととおり。ひとまず。とにかく。一往に同じ。

一往　ひたすら。ひとすじに。〈国〉①ひととおり。ひとわたり。一応。②一度。一回。

なお〈国〉とあるのは，凡例を見ると「熟語で，国語特有の意義」とある。漢語そのものとしては一応と一往とにはそれぞれの意味があって，同一とはいえない。したがって，別語のわけであるが，国語としては，共通に，ひととおり，ひとまず，とにかく，というような意味において一応とも一往とも書かれる，ということのようである。これは私に言わせれば，まさに宛て字でなければならない。私はこれまで一応は宛て字で，一往はそうでないと信じたからこそ，ことさら異を立てて「一往」と書いてきたのであるが，『角川漢字中辞典』によれば，どうやらどちらも宛て字で，結局五十歩百歩ということになりそうでもある。

そこで次に『広辞苑』（第二版）を見ると，

いち・おう［一応］一往に同じ。

いち・おう［一往（イチワウ）］①ひととおり。ひとわたり。大略。②一度。一回。「一も二往も」

『新訂大言海』

いち―おう（副）一応　いちわう（一往）に同じ。水滸伝，第三回「一応費用，都是趙某備弁」

いち―わう（名）一往　ヒトワタリ。ヒトトホリ。イチオウ。皇侃，論語義疏「一往観ニ回終日黙識不ニレ問，殊似ニ於愚魯…」

「いちおう」の宛て字としては一応・一往に甲乙はないようであるが，かつて哲学の青書生であった私に「一往」にうったえるものがあったことを告白せざるを得ない。それは仏教語の往相―還相（ゲンソウ），往相回向―還相回向への連想である。還相回向というのは，一度悟りを開いて浄土に往生した後，そのまま浄土は居坐らず，もう一度穢土に還って来て，いまだ開悟の機を得ない一切衆生を教化し，共に極楽往生の本願を遂げることである。これに対して，往相ないし往相回向は，まず自分ひとりが悟りを開いて浄土に往生し，他はかえりみない行き方を言う（と私は解した）。自分だけ助かっても，同胞がたれももとのなまではしようがない。弁証法で最初の否定はたかだかフュール・ジッヒ（対自態）を成立させるだけで，いま一度否定を重ねて（否定の否定）はじめてアン・ウント・フュール・ジッヒ（即且対自態）の具体相に到達することができる。何ごとであれ，そこまでぜひ到達したい処であるが，用意不足の現在では，一次否定がせいぜいである。そこでとりあえず――ひとまず――一往ということに，私はしているのである。

たまたま『沙石集』（無住著，弘安2―6年（1279―83稿）を読んでいたら，

「諸宗ノ論ハ，一往他宗ノ劣ナル処ヲ見テ，我家ノ勝レタル義ヲ以テソシル。相撲ヲ取ルニ，吾ガツヨキ所ヲ以テ，人ノヨハキ所ニ当ルト云フ如シ」（日本古典文学大系，85，172頁）

というのに出くわした。『沙石集』は宛て字の少なくないもののようだけれども，別に宛て字だとする頭注もない。相当古くから「一往」の用いられた例を見つけたわけで，いささかわが意を得た感をもった。ついでにもう一つ，小型国語辞典のうちで最も折衷的で，最も許容幅の広いといわれる『岩波国語辞典』には，

いちおう〔一応・一往〕〔副〕ひとまずのところは，そう言えるというさま。ひととおり。「―そう結論できる」「―のあいさつ」「―も二往も注意しておいた」

とある。

うつつ〔現〕

芭蕉が『ひさご』で

順礼死ぬる道のかげろう　　曲水

に，

何よりも蝶の現(うつつ)ぞあはれなる

と付けた。「何よりもあわれなものは現実の蝶のすがたである。前句をはかなき夢の世と観ずる心からの付(つけ)で，おのれの短き命を知らないで浮かれ舞う蝶に，あわれをもよおしたのである。巡礼の新墓のあたりを飛び交う蝶であろう」と中村俊定は解説している（日本古典文学大系『芭蕉句集』365頁)。この解釈で結構であるとは思うが，「現実の蝶の姿」が，文字どおり現実でありながら，しかもどこか現実ばなれがして，いわゆる「夢かうつつか」といった風情が，周荘の夢に胡蝶の故事を引合いに出すまでもなく，やはり芭蕉をとらえたのではないか。この句には幸田露伴も千二，三百字を費している（『露伴評釈芭蕉七部集』 287—8頁）が，なるほどとうなずかれる。「うつつ」というのはもちろん，夢幻に対する現実のことでもあるが，夢現不定のような場合をも俗にうつつというのは，実は夢現（ゆめうつつ）の略で，「うつつのように聞いた」というのは「夢のように聞いた」ということで，人をして眠らしめずに責め問うの，うつつ責という語もある。ここに面白いのは谷川士清の『伽羅庵随筆』に「うつゝの説」というのがあって，「うつつ」というのは「起居て心のはきとしたる」をいうように聞えず，元来，うつつというのは「物も定まらで空虚の如くなる」に用いることばであったのを，古の博士が唐より現という字のはいってきたとき，あやまってこの字をあててしまった。しかし，民衆の間には昔ながらのものが残っていて，いま「起きもやらず寝もやらず，うつらうつらとして居たる間」をうつつというが，これこそ本来の姿だと言ってある（叙上露伴評釈から)。妥当な説かどうかは別として，うつつということばのわれわれの実生活において有している意義を，ずばり言いあてていることは否まれない。ちょっと面白いので書きとめた。

ついでに『広辞苑』を見ておくと，

うつつ〔現〕（ウツウツの約か） ①（死んだ状態に対して）生きている状態。②（夢に対して）目覚めている状態。現実。③気が確かな状態。正気。④（「夢うつつ」と続けていう所から誤り用いて）心がうつらうつらとして正気でないこと。夢心地。また，その状態の人。

谷川士清に従えば，あて字の現に引かれて，うつつは Wirklichkeit ないし presence, consciousness の意味になってしまって，本来の意味は誤用にもとづくとして今 ④ に収容されているというわけである。そこで次に「うつつ」を含む若干のことばを『広辞苑』から挙げてみよう。

うつつごころ〔現心〕生きている心地。正気。うつしごころ。

うつつぜめ〔現責〕拷問の一。睡眠をとらせない方法。

うつつのやみ〔現の闇〕現実ではあるが，真実がおおわれている，闇のような人生。無明におおわれた生活をたとえていう。新拾遺・哀傷「世の中の——に見る夢の驚くほどは寝てかさめてか」

うつつのゆめ〔現の夢〕この世の現実が夢のようにはかないこと。また，逢ってじきに別れることを夢のはかないことにたとえていう語。続後撰・恋「逢ふと見てさめにしよりもはかなきは——の名残なりけり」

うつつびと〔現人〕現世の人。俗世にある人。うつしびと。狭衣五「かうまで——にて見るべかりし人かは」

うつつをぬかす　正気を失う。夢中になる。

こう列挙してみて，ことばの微妙さに今さらながら驚かされた。④の夢うつつからの誤用とされているものが，谷川士清の説にからめまいでも，すこぶる意味深長であることが思われる。

ところで「うつし」をついでに洗っておけば，これはシク活用の形容詞で，①現実にある。現に生きている。古事記上「うつくしき青人草」②意識がたしかである。正気である。という意味のことばで，これはまさに wirklich ないし conscious にあたる。したがって「うつしごころ」(現し心＝明らかに目ざめている心。正気)，「うつしごと」

(現し事＝正気ですること。意識してすること)，「うつしびと」(現人＝①〔死者に対して〕この世に生きている人。②〔出家に対して〕普通の人。在俗の人)，「うつしみ」(現身＝現世の人の身。生きている身)，「うつしよ」(現世＝この世) というような複合語もできる。「うつつ」が白昼夢のようにどこか縹渺としているのに対して「うつし」は白昼のようにはっきりしていて，漢字では現・顕があてられる。

ヨシ—アシ（葭—葦—蘆）考

付＝ハマオギ（浜荻）

アシといえば谷崎潤一郎の『蘆刈』を思い出す。さらにさかのぼって古事記の「葦牙(あしかび)の如く萌え騰(あが)る物」を思い起こす。コンティキ号の冒険はアシ船で行なわれたのではなかったか。もっともこの場合のアシは，ナイルのパピルスの類かも知れない。アシといえば，さらにエウフラテス，ティグリス両河の河口に近いところでは，アシを束ねて敷きつめた水上に原地人の部落が営まれているさまを，テレビで見た。等等。ところで私はヨシで育った。こどもの頃なじんだいろはかるたにも「ヨシの髄から天のぞく」とあった。しかし，そのヨシは元来はアシで，「あしノ，悪シト聞ユルヲ忌ミテ，よしトモ云フ」と『大言海』にはある。『広辞苑』にも，よし〔葦・蘆・葭〕の項に「アシの音が『悪し』に通じるのを忌んで『善し』にちなんで呼んだもの——あし(葦)に同じ」とある。はたしてそうなのか。私はむしろ，土地に結びついて方言的に，あるところではアシといい，あるところではヨシと呼ぶので，そう指称されるものは同じものであろうと考えた。少なくとも私の育った名古屋の東部ではヨシであった（大正期)。結局，アシ，一名ヨシ，もしくは，ヨシ，一名アシ，と規定してよいのであるまいか。念のため座右の漢和辞典を見ると，

葦　イ（ヰ）　あし

蘆　ロ　あし

葭　カ　あし（『角川漢和中辞典』)

で，訓はあしだけが挙げてあるが，字義ではいずれもヨシが認めてある。

そこで小学館版『原色植物図鑑』をみると，

ヨシ・アシ（イネ科）*Phragmites communis* Trinius 沼・川原など湿地に群生する多年草で，高さ1～3メートルになり，長い地下茎をひいてふえる。葉は長さ20～50センチ，幅2～4センチ，薄緑色の鞘(さや)とともにうすく毛があるがのちになくなる。夏から秋にふさふさした穂を出し，うなだれる。小穂は長さ12～17ミリメートル，白く長い毛におおわれた2～4の小花からなる。云云。和名はアシが正しく，……アシの音が悪しに通じるので，縁起をかついでヨシ（善）としたのである。〔分布〕日本全土，北半球温帯～亜寒帯。

『広辞苑』では，地下茎のところが「地中に偏平な長い根茎を走らせ，大群落を作る」。「茎に節を具え葉は笹の葉形，秋，多数の細かい帯紫色の小花から成る穂を出す。茎で簾(すだれ)を作る」とある。アシのイメージはだいぶととのってくる。

『古事記』上巻のはじめに「次に国稚(わか)く浮き脂の如くして，くらげなすただよへる時，葦牙(あしかび)の如く萌え騰(あが)る物に因りて成れる神の名は，ウマシアカビヒコヂ(宇摩志阿斯河備比古遅)の神」とある。古く『倭名抄』には「葦，阿之」とあるそうだから，どうも昔はアシであったらしい。湿地の多かったであろう瑞穂の国の住人にはアシは太古から親しいものであったであろう。

ところでヨシも，「いろはがるた」の先にふれた「葦いずゐから天のぞく」——これは「ヨシのずい」ではあるまいか。「管ヲ以テ天ヲ窺フ意，見識ノ狭キコト。管見」と『大言海』には説いてある。縁起をかついだのか，ともあれ，ヨシと言ったのもずいぶん昔からのことらしく，

新千載集，九，釈教「津ノ国ヤ，難波ニ生フルよしあしハ，言フ人カラノ言ノ葉ゾカシ」。

住吉社歌合「汀ナル汐蘆(あし)ニ紛フ浜荻(はまおぎ)ハ，よしトゾ見ユル，ヨサノ浦人」。住吉社会歌合跋（俊成「難波ワタリニハあしトノミイヒ，東(あず)ノ方ニハよしト云フナル」(『大言海』)

どうも地方によって呼び名がアシとなりヨシとことなるので，悪しを忌むというのは後からのこじつけではあるまいか。

ところで前引住吉社歌合に「浜荻」が出てきて「汀ナル汐蘆ニ紛フ浜荻ハ，よしトゾ見ユル」

と，まるで浜荻はアシではなくてヨシだと読みとれるようである。そこであの「難波の蘆は伊勢の浜荻」という『菟玖波集』の句が思い出される。これはしかし『万葉集』巻第四，500「神風の伊勢の浜荻　折り伏せて　旅寝やすらむ　荒き浜辺に」とある，「此歌ヲ誤解シテ，何人カ，菟玖波集ニ見エタル連歌ノ本末ヲ合ハセテ一首トシテ『物ノ名モ所ニヨリテ変ハリケリ，難波ノ蘆ハ伊勢ノ浜荻」トシテ，伊勢ニテ蘆ノ異名トスト云フハ非ナリ」と『大言海』にある。しかし，この文章，私はどうも理解しかねるのである。万葉集の歌ではアシには言及せず，ただ浜荻とだけうたわれている。『菟玖波集』の連歌は，万葉集の歌とは関係ないのではあるまいか。ともあれ，このあとにすぐ続けて『大言海』には（歌袋「御抄，竝ニ童蒙抄ニ，伊勢国ニテハ蘆ヲ浜荻ト云フナド云ヘルハ，誤ナリ」）と引いてある。これは注目される。にもかかわらず「難波のアシは伊勢のハマヲギ」は，なかなか人口に膾炙していたものらしく，謡曲『蘆刈』に「中中のこと，この蘆を，伊勢人は浜荻と云い，難波人は蘆と云ふ」とある。

ところで浜荻は，アシ（もしくはヨシ）とは別ものなのである。

『大言海』には「はまおぎ」を「浜辺ニ生ヒタル荻」と簡単に処理して，ハマヲギという名の植物があるのでないことを言っているが，正にそうなのである。そこでついでに「ヲギ」を見ると，

「荻，草ノ名，水辺及ビ原野ニ生ズル禾本科ノ多年生草本。匍匐根ハ地中ニ蔓延シ，節毎ニ茎葉テ抽キ，高サ5，6尺ニ達ス。葉，花共ニ茅(かや)ニ似テ長大ナリ。茎ハ蘆(あし)ニ似テ，節ノ間短ク，肉厚ク，中ノ孔狭シ。花ハ初メ淡紫ニテ，後ニ白シ」とある。

そこでまた前にも引いた『原色植物図鑑』を見ると，オギ（イネ科）*Miscanthus sacchariflorus* Bentham で，やはり川や池のはたの湿地に生える多年草で，図版で見る限りアシに頗るよく似ているが，やはり別ものである。ハマオギというのは見出されない。『倭名抄』草類，「荻，乎木」，『字鏡』「荻，乎支」——オギは昔からヲギと言ったので，万葉集，巻十四 3446 に「妹なろが　つかふ河津の　ささら荻　あしとひとこと　語りよらしも」とある。また巻十 2134「葦(あし)辺なる　荻の葉さやぎ　秋風の吹き来るなへに　雁鳴き渡る」とある。ところで3446の歌は解釈に異説の多い歌で，「ささら荻　あしとひとごと」と，ごと濁ってよんで，「オギとアシとが同一の如きもののように，お前と私の中を人人がうわさをしているようだ」あるいは「お前と私は，オギとヨシのように似たもの同士なので，よく釣り合って結構ではなかろうか」というように解する向きもあるそうであるが，澤瀉久孝博士は「あしと一言」——「都合がわるいと一言(ひとこと)」と考えて，「いとしい妹が使う河の船着場の小さい荻，それと似た葦，そのアシという言葉，——今は都合がわるいという——一つをあなたに語りたいのよ」と口訳しておられる。澤瀉博士も，またこの歌を詠んだ万葉人も，荻と葦とは頗るよく似てはいるが，別ものなことを十分承知しており，その上ではじめてこういうレトリクが成り立ったのであろうと思う。2134の歌にしても「葦辺なる荻の葉さやぎ——」と頗る微妙な表現がしてある——すくすく伸びるアシと，やや小形のオギとを見わけて，その，アシの群落に接してオギの葉がさやぐ，とこまかいところを表現しているものと見るのはどうであろうか。

さて澤瀉博士は，500の「神風の伊勢の浜荻——」の歌の訓釈のところで，浜荻を海辺に生えている荻とし，荻を『倭名抄』(十)の「荻 乎岐 葦ト相似テ而モ一種ニアラズ」に基づけて別ものし，巻一64「葦辺ゆく鴨の羽がひに　霜ふりて　寒き夕は　大和し思ほゆ」の訓釈にもやはり『倭名抄』(十)の「葭……蘆之初生也」とあり，『説文』に葦に「大葭也」，葭に「葦之未秀者」と注してあるのに言及しておられる。これは面白い。アシが若くてまだ穂の出ていないのをヨシという。アシとヨシの言い分かちには，やはり，基づくところはあったのである。

しかし，そうなるとまた疑問が生まれてくる。ヨシが成長してアシになり，それが枯れて丈の高い条桿が残る。これを刈り取って，編んでヨシズ(葭簾)をつくる。アシズでなくてヨシズというのに何故か？　また「ヨシのずいより天のぞく」もアシのずいではない？　疑問はやはり晴れない。

影法師（かげぼうし）

『広辞苑』に「障子や地上などにうつった人の影」とある。かげぼしとつづまっていうこともある。ところで『冬の日』に

影法の暁寒く火を焚きて　　芭蕉

とある。解釈では，普通，影法，影法師の略とある。ところが『露伴評釈芭蕉七部集』を見ると，「影法は今の影法師なり，略語にはあらず」とこれを否定している。すべて何ょ坊というのは，人に擬していう辞で，しわん坊，ケチン坊，取られるものを取られん坊，取るものを取りん坊，または取ろ坊。ドロボウは，してみるとこの取ろ坊からきて，きたないことなのでにごったのではあるまいかと考えられる。法はむろんあて字で，したがって坊でもよく，俗に泥坊が泥棒になってしまったのであろう。立ちん坊は，明治・大正のころ大きな坂の下などで，路傍に立っていて，重い荷物を積んだ荷車を待ちうけ，そのあと押しをして，そこばくの駄賃にありつく最下級の職業(？)であった。今日では運送方法・運送機関が全面的にモーター化してしまったが，当時は馬車・牛車が主要運搬具で，人間も文字通り汗水垂らして荷車を引いた。東京は坂が多いので，荷車を引く人は，大きな坂では困ったものである。

ついでいえば，大正12年（1923）の大震災前の東京では，山の手で下町から大した坂なしで来られるところは少なかった。山の手線の高田馬場駅と目白駅の中間，神田川，妙正寺川沿いの，今の西武新宿線沿いの低地は，本町・深川から，坂らしい坂なしに来られる数少ない場所の一つであった。両国橋を起点とすれば，柳原土手を経て，須田町を通り，三崎町から水道橋へ出るか，九段下から飯田橋に出て，江戸川沿いに早稲田へ出，戸塚へ出ると坂を上らなければならないので，これを避けて，砂利場から目白台の下，学習院の下を通って山の手線のガードをくぐれば，下落合までほとんど坂なしに来られる。馬車が主要な輸送機関であった当時は，中小工場のためには有利な立地条件を具えたところであったのである。

もとへ戻って，露伴によれば，いま影法師と書く師は，添わって生じたので，孤独の「独り坊」を日常「ひとりぼっち」というあのちとなんら変りない。芭蕉の貞享元禄のころには，影法とも影法師ともいった由で，影法は影法師の略ではなかった，というのである。

キリギリスとコオロギ

(1)

キリギリス科 Tettigoniidae は，直翅目（ちょくしもく）に属する昆虫で，その種類は頗る多く，世界中では5,000種も知られているそうである。中でもわが国に見出されるキリギリス，クツワムシ，ウマオイは，鳴き虫として従来愛好せられてきたが，民衆の間における認識は頗るあいまいなようである。私はこころみに学生に質問してみたが，知り分けるどころか，てんで興味もないらしいので驚いた。しかし，過去においてもその知識はかなりあいまいで，キリギリスがかつてコオロギと混同せられていたらしいことはともかくとしても，たとえば『広辞苑』を見ると，キリギリスは「①コオロギの古称，②直翅目の昆虫。バッタ類に似るが，糸状の触角が体長より長いので容易に区別できる」とあって，さし絵がついているが，これはまちがいなくキリギリスである。「体長約35ミリメートル。たたんだ翅の背面は褐色，側面は褐色斑の多い緑色。盛夏，原野に多い。ギス，ギッチョ。」ここまではよいが，さらにハタオリが付け加えてある。ハタオリは全く別もののはずである。そこで念のため「はたおりむし(機織虫)」の項を見てみると，キリギリスの異称とある。これには驚いた。そこで『角川漢和中辞典』を見たところもういちど驚かざるをえなかった。螽斯（しゅうし）「はたおり虫。すいっちょ。ぎっちょ。蝗(いなご）など」とある。ミソもクソも一緒とはこのことである。

まず①キリギリス *Gampsocleis buergesi* de Haan（キリギリス科）は，大型で，広辞苑に説明してあるまさにそのもので，雄は昼間ギーチョンと発声し，鳴く虫として愛好される。雑食性。保護色を呈するため，草むらにいるときは見つけにくく，わが国では本州以南にいる。間歇的に鳴く鳴き声をたよりに，その潜んでいる草むらをつきとめ，細い竹ぎれの先にネギの白いところをつけて，静

かにさし入れてやると，やがてひょいとそのネギに取りつく。それをじりじりと静かに引き寄せてとらえる。父親がそのようにして捕えてくれた記憶がある。私どもはもっと野蛮で，鳴いている草むらを見届けると，それをめったやたらに踏みにじるのである。そうしておいてじっと見ているとやがて折りひしがれた草の下から，おずおずと這い出してくる。それを小魚をすくうあのタマ網でワッと押えてつかまえた。虫かごに入れて，キウリやナスなど輪切りにして与えておくと，それをたべて，ギーッ・チョンと，汗のにじみ出る暑いひるさがりのしじまを，よく鳴いた。しかし祇園会のころ（7月17～24日）になると，祖母がうるさくて，うどんをたべさせて野原へ逃がしてやった（名古屋）。

②ハタオリ虫は，とぶとき，キチキチ，もしくはハタハタと節（ふし）のある音を発するバッタの種類で，漢字では蟣蚻（ケイセキ）と書く。直翅目のバッタ科 Acrididae に属する。

なお鳴く虫で，キリギリスに近いものでは，まず，③クツワムシ――キリギリス科。黄褐色または緑色の，大きさも形もキリギリスによく似ているが，翅脈の紋状隆起をこすり合わせて，夜ガチャガチャとにぎやかに鳴く。精悍な昆虫で，うっかり食いつかれると，容易なことでは離してくれない。まるで醤油のような液を出しながら食いさがり，無理にもぎ離そうとすると首がもぎとれてしまう。首がもげても離さないので，子供のころ，敬遠して余り捕えなかった。関東以西，四国，九州に見出される。

それから ④ウマオイ（うまおいむし＝馬追虫），これまたキリギリス科に属し，キリギリスよりはるかに小柄で，やせぎすで，それが紗のように透き通る緑色をしている。頭頂と前胸部・背面は褐色。なよなよと女性的で，繊細といった感じが私は好きだ。肉食性で，夜行性で，夜蚊帳（かや）などにとまってスイーッ・チョン，スィーッ・チョンと細いながら張りのある鳴き方をする。俗名スイッチョという。やはり本州以南に分布する。

ところで，ちょっと横道にそれるが，武藤禎夫編『江戸小咄辞典』（東京堂 164 頁）「蟋蟀 きりぎりす」の項を見ると，

「大すべたな姉と，器量よしの妹二人連れにて，薬師参りの道にて，きりぎりすを買い，妹が手のひらへ上げたれば，指を喰いつかれ「姉さん，きりぎりすが喰付きやした」といえば「なんの大層な，見せや」と姉が手のひらへ上げたれば，きりぎりす，顔を見て舌打。（高笑ひ・安永5）

というのが挙げてある。これを見て，またぞろ私は驚いた。このキリギリスが，江戸時代のキリギリスは今のコオロギであるという通説に従えば，コロオギなぞ街頭で虫屋が売るはずがない。これはやはり今と同じに，文字通りキリギリス（ギス）でなければならない。見出しに今ではコロオギと読む「蟋蟀」を出して「きりぎりす」と割注がついているのも考えさせられる。キリギリスならば，鳴く虫なので，私の子供のころは，虫屋がスズムシやマツムシ（チンチロリン）などと一緒に売りにきた。だから小咄の姉妹は，そのキリギリスを買ったのであろう。そのキリギリスが妹の指にくいついた。これはおかしい。くいつくといえば，前に触れた，あのガチャガチャと鳴くクツワムシでなければならない。やかましいほど賑やかに鳴くので，小籠に入れて縁側ののき先などに吊してあるのを見たことがある。姉妹はこのクツワムシを買ったのであろう。小咄の作者は，都会の住人なので，よく姿の似ているクツワムシとキリギリスとを混同して，つい，よりよく周知されているキリギリスとしてしまったのではなかろうか。この疑問はともかくとして，この咄は，安永天明の頃（1772～88）には，コロオギでなくキリギリスをキリギリスといっていた一つの証左になるのではなかろうか。この小咄のキリギリスは，美女の妹の手だからくいついたので，醜女の姉では，さすがのキリギリスもチョンと舌打ちしたというので，これはギスのキリギリスでなければ利かない。作者はわざと食いつくクツワムシと混同させて滑稽小咄を構えたのであろう。

(2)

次にコオロギ。直翅目コオロギ科 Gryllidae の昆虫の総称。体長は2センチ前後，体形は楕円形で，上下にやや扁平で，体色は暗色で目だたないものが多いが，エンマコオロギのごときはつやや

かな黒褐色である。触角は非常に長く，２対の翅と，尾端に１対の尾毛がある。雄は前翅上に発達した発音機構を有し，それぞれ特有の発声を行なう。これを普通鳴くと称するので，コオロコオロと鳴くのがあるので，コオロギという名が生まれたのかも知れない。夜寒になるころ，その鳴き声が「つづれさせ」もしくは「つづりさせ」と聞えるのもある(ツヅレサセコオロギ)。「つづれさせ」はつづれをさせで，「つづりさせ」は動詞「つづり・さす」の命令形なので，どちらも正しい。地方的にいい方が違うのである。後肢は長く逞しくいかにも昆虫らしい。草地などに多く，物の陰にかくれて，夏から秋にかけて鳴く。古くはキリギリスといった。『奥の細道』に，

むざんやなかぶとの下のきりぎりす　芭蕉

「いとど」のことでもあるといわれ，やはり芭蕉

あまのやは小海老にまじるいとどかな(猿蓑)

とあるが，これはカマドウマかカマドコオロギであろう。直翅目カマドウマ科 Rhaphidophoridae に属し，一般に好湿性，夜行性で，台所の揚げ板を上げると，ほこりにまみれて物陰にうずくまっていることがある。洞窟や森林の石の下，朽ち木の中などに見つけられる。全体に黄褐色で，体長は２センチ内外。触角と後肢が非常に長く，うす暗いところでその長い，しなやかな触角をそびやかしているさまは，なかなか俳味がある。カマトコオロギは体形，体色ともカマドウマに頗る似ているが，これはコオロギ科に属する。

臼をおこせばきりぎりす飛ぶ　越人（曠野）

これはカマドウマかも知れない。

ところで今の人にはもはや混同はなかろうと思っていたのに，思いがけない例にぶつかった。

石炭の屑捨つるみちの草むらに秋はまだきのきりぎりす鳴く　長塚　節

これは明白にコオロギである。詞書に「……雑草のあまた茂りて月見草ところどころにむらがれり。一夜螽斯をきく」とある。螽斯は字としてはシュウシ＝きりぎりすであるが，キリギリスは夜鳴かない。節は晩年喉頭結核を病み，名医を求めて北九州へ赴いたことがある。そのとき筑豊炭田の，炭殻の散らばるあたりに月見草の咲くところをそぞろ歩きしたのであろう。節は万葉系の歌人なので，万葉時代には……とも考えたが，万葉時代はコオロギはコオロギで，キリギリスとはいわなかった。『万葉集』巻八に「湯原王蟋蟀歌一首」というのがある。

夕月夜(ゆふづくよ)　心もしのみ　白露　置く此の庭に　蟋蟀(こおろぎ)鳴くも（1552）

この「蟋蟀」をどう訓むか。これを澤瀉久孝の『万葉集注釈』巻８（193—４頁）についてみると，かつてはキリギリスと訓んだ由で，これを詠み入れた歌が７首あって，いずれも４音に訓むべきところ，上例も同様であるという。そこで『童蒙抄』に「上代はこふろぎと訓したりと見えたり」とあって，『万葉考』（加茂真淵），『万葉集略解』（加藤千蔭）以後「コホロギ」と訓むに至った。そこで結論として『万葉集全釈』（鴻巣盛広）の，

「平安朝では，コホロギとキリギリスと二つながら行はれてゐたのである。けれども歌文にあらはれたものを見ると，万葉ではコホロギ，平安朝ではキリギリスに限られてゐる。して見ると，万葉集のコホロギと，平安朝のキリギリスとは，同一物と考へるのが穏当である。さうして平安朝のキリギリスは，その用例から見て，今のコホロギに相違ないから，万葉のコホロギは即ち今のコホロギなのである。コホロギは今のキリギリスの古名だといふ説は当らない」

とあるのを引いてある。妥当の説と思う。つまり今のキリギリスというのは，近世以後「螽斯」をキリギリスといったもので，それは夏の日盛りに鳴くギスのことで，コオロギとは全然別ものである。ところで佐佐木信綱博士は「こほろぎは，今のコホロギ，マツムシ，スズムシ，キリギリス等の秋の虫の総称」と言っておられる由で，そういう見解もあったとすれば，角川漢和中辞典に「螽斯」を「はたおり虫。すいっちょ。ぎっちょ。蝗(いなご)など」とあったのも，まるで理由がなかったわけでないことがわかった。

中世にコオロギをキリギリスといった例を，ついでにちょっと挙げておく。

きりぎりすつづりさせとぞ鳴くなれどむらきぬもたぬ我はききいれず　素性法師

秋風はほころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く　在原棟梁